

## 中国の日本語教科書研究 に於ける音声教育

## 清末の日本語教科書

著者	続 三義
著者別名	XU Sanyi
雑誌名	経済論集
巻	42
号	1
ページ	123-137
発行年	2016-12
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008379/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008379/</a>

# 中国の日本語教科書研究

## ——清末の日本語教科書に於ける音声教育

### 続 三 義

#### 1. 初めに

中日両国は一衣帯水の隣国であり、文化交流が長い歴史を持っている。早くも『漢書・地理誌』（紀元82年）に日本に関する記述がある。その後紀元1世紀に、『後漢書・倭伝』にも日本に関する記述があり、さらに、3世紀には『三国志・魏書・烏丸鮮卑東夷伝』（通称『魏志・倭人伝』）では、作者の陳寿が2千字ほどの文字を費やし、日本の政治制度、風俗流行、社会生活などに関しかなり詳しい記述をした。7世紀（紀元600年）から日本は中国に遣隋使、遣唐使を派遣し始め、同時に多くの日本人留学生も中国に赴き、中国の先進的文化と技術を全面的に学んだ。『隋書・倭国伝』には、日本の地理、政治状況に関して更に詳しい記述がある。宋の時代になり、日本からは日本刀、日本扇子、螺鈿などの工芸品、特産品などが中国に伝わった。石曉軍は『中日両国相互認識の変遷』の中で明の時代における日本研究の様子を次のように述べている。薛俊の『日本考略』では初めて「寄語略」の欄を設け、中国語で日本語の語彙の発音を記し、359個の語彙を記録しており、そして『日本考』には1186個の語彙が収録され、『日本一鑑』には更に3401個の語彙が収録されている、と。清代に至っては、中国は列強の侵略を受けるが、日本が明治維新を機に発展の道を歩み始めたことで中国人は大いに震撼させられた。中日の甲午海戦（日清戦争）によって中国人は一層日本に関する認識を新たにした。20世紀初葉から多くの中国人留学生が日本を訪れ、日本について学び始めた。こうした歴史的背景のもとに、日本語教科書も自然に需要度が高まり、中国人の手による日本語教科書が初めて編纂されるようになったのである。

外国語学習では、発音（音声。この研究では特別な場合以外、発音という用語を用いる）の学習は基礎である。しかし、発音はどのような形で教科書に出てきているのだろうか。日本語に関して言えば、発音が教科書に現れるのは、次のいくつかの分野であろう。

1、仮名の表し方、2、仮名の発音に関する説明のし方、3、ローマ字使用のいかん、4、アク

セントの表記、5、発音項目の設定、6、音声学の角度からの解説、7、発音練習項目の設定、8、その他の発音項目（イントネーション、プロミネンス、プロソディーなど）など。

日本語の発音は主に日本語の表音形式である文字——仮名で表されていることから、教科書の中に於ける仮名の出し方が非常に重要になる。本研究は主に上述の諸項目に絞って、清末の日本語教科書における発音教育の現れ方について研究し、その発展の軌跡をたどり、その優劣を評価し、これからの教科書編纂の参考になるものを提供する。本研究は清末から現代までの日本語教科書研究の一部である。

清末の日本語教科書に関しては、次のものを研究対象にしている。

表1 清末の日本語教科書

番号	作者	教科書名	出版社	出版時間
1	陳天麒	東語入門 2 卷	不詳	1895
2	唐宝鏐・戢翼翬	東語正規 3 卷	作新社	1900
3	長谷川雄太郎	日語入門	善隣書院	1901
4	商務印書館編訳所	東文法程	商務印書館	1905 再版
5	坪内蔵原著・沙領雲、張肇熊訳	和文漢訳読本 1－6	商務書館	1901～1904
6	内堀維文	日語読本（1－4）	上海商務印書館	1909

## 2. 清末の日本語教科書音声教育

清末の日本語教科書を通してみれば、いくつかの特徴がみられる。当時、日本では、日本語の書き方は多くが「いろは歌」から始めていたし、しかも片仮名が主で平仮名が副という事情から、中国の日本語教科書も多くは「いろは歌」から教科書を始めている。具体的な仮名の教育も、まずは片仮名、そのあと平仮名の順である。まず『東語入門』について見てみたい。

### 2.1 『東語入門』

『東語入門』(1895) は中国人が作った最初の日本語教科書の1つである。「巻上」と「巻下」に分かれている。著者は陳天麒、出版社は不明。教科書は52頁で、序言、凡例と目次が4ページ半を占め、発音部分は4ページで、語彙はそのほかの部分を占めている。

『東語入門』では、日本語の発音についてきわめてはっきりした説明が施されている。『東語入門』の凡例（図1を参照）では、次のような説明がある。（記述は省略）

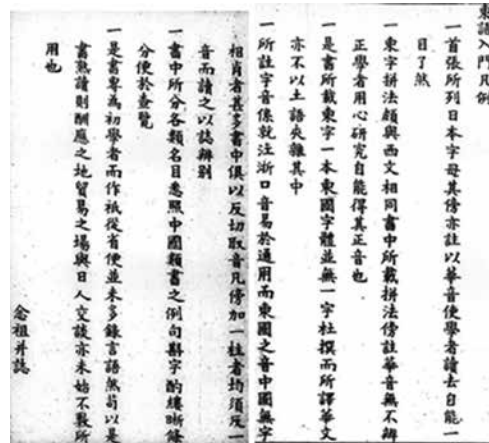


図1：『東語入門凡例』

ここで注目したいのは、1つは、日本語の仮名の傍に中国語の発音が示されているということで、それを中国語で読めば、日本語の発音が一応、読めるということになる。

もう1つは、その中国語の読み方は「江浙口音」つまり江蘇省・浙江省あたりの発音で記したものである。そしてもう1つは、中国語にない発音については、中国語の発音を読むための方法の一つの「反切」をもって示されていることである。次の「いろは歌」(図2)の中の発音の表記を見ればわかる。

み	三	ミ	コ	み	井	れ	レ	り	リ	い	イ
シ	ハ	エ	エ	の	ノ	ろ	ッ	ぬ	ヌ	ろ	ロ
ろ	エ	エ	エ	ね	オ	つ	ツ	る	ル	は	ハ
ひ	ヒ	あ	ア	く	ク	ね	子	を	ヲ	に	ニ
も	モ	さ	サ	せ	ヤ	な	ナ	わ	ワ	ほ	ホ
せ	セ	き	キ	ま	マ	ら	ラ	か	カ	へ	ヘ
す	ス	ゆ	ユ	け	ケ	む	ム	よ	ヨ	と	ト
ん	ン	め	メ	ふ	フ	う	ウ	た	タ	ち	チ

図2：いろは歌

この「いろは歌」の中で、「キ」の発音に関しては、「克以」という2字で示している。そして、次の片仮名表の中では、「ヒ」に関しても「反切」を使って、「黒以」で示している。更に、濁音の

「ギ」に関しても、「解以」で示している（図3を参照されたい）。

中国の音韻の伝統からすれば、歴史上、発音に関しては、1字で1音を示したり、結構難しい規則の「反切」で示したりする方法で中国語の漢字を読んでいた。『東語入門』でもこの方法を踏襲している。所謂「反切」は最初の漢字の「声母」（子音）と2番目の漢字の「韻母」（母音および音節尾子音）で1つの漢字の読み方を示すものであるので、これで日本語を読むときに、自然にずれが生じる。著者は「江浙」の方言で日本語の発音を示すのも、当時では仕方のないことであろう。しかし、著者が非常に事実に基づいた方法を用いていることは評価されなければならない。

教科書の「いろは歌」は、カタカナ、平仮名、中国語の漢字という3種類の文字で示されている。学習者が早い段階で片仮名と平仮名の表記法、そして、発音の知識を吸収できるように図っていることは、とてもいいことである。

『東語入門』の「いろは歌」には次のような漢字が使われている。

以 洛 哈 泥 化 海 訖 气  
利 奴 路 啞 滑 卡 搖 他  
立 沙 之 内 那 辣 磨 乌  
伊 诺 啞 哭 耶 麦 开 夫  
誇 贤 铁 矮 杀 克 以 油 美  
米 希 贤 希 木 息 司 痕

「いろは歌」の最後の仮名は「ん」で、片仮名の外に、中国語の発音の「痕」でこの発音は示されている。

「いろは歌」以外に、「清音」、「濁音」と「次清音」の表（図3）が挙げられているが、ここの「次清音」は、現代の教科書で言っている「半濁音」のことである。

図3：清音 濁音 次清音

但し、「清音」表の後ろの説明は、次のようになっている。“右五十字母系调音之用须读五字一句如呼アキ即成ケ音呼キア即成力音呼イカ即成ア音呼カイ即成キ音余可类推矣矣”。つまり、「アキを読めばケとなり、キアを読めばカとなる」。後者はなんとかわかるが、しかし、“呼アキ即成ケ音”(アキを読めばケとなる)の説明は、今の発音知識では、その意味が分らない。

「清音」表では、次のような漢字が使われている。

矮 以 乌 贤 哑  
 卡 克以 哭 开 誇  
 杀 希 司 息 沙  
 他 气 之 铁 讬  
 那 泥 奴 内 诺  
 哈 黑以 夫 海 化  
 麦 米 磨 美 木  
 耶 以 油 贤 揺  
 辣 利 路 立 洛  
 滑 伊 乌 贤 哑

しかし、面白いのは、「清音」表で使っている漢字は、必ずしも「いろは歌」の漢字と同じものではないことである。1つの外国語の発音に関して、母国語でその発音を示す際、たとえ母語の発音は同じでも、同じ1つの漢字で示した方が、学生には混乱を起させない1つのルールであろう。

『東語入門』では「長音」、「拗音」と「拗長音」も挙げられているが、この用語は使われていなかった。そしてその読み方は歴史的仮名遣い（言うまでもなく、その時代では「歴史的仮名遣い」という用語はなかったはずだが）を用いている。数例を挙げておく。

イヒ ニヒ ハウ ハフ チャ チャウ  
 以以 泥以 化 化 气耶 曲  
 キョウ キャウ ギョウ ユウ ユフ  
 克欲 克欲 辯欲 油 油

『東語入門』の本文は、中国語の慣用語句を用いて日本語を学習するという方法を取っている。中国語の単語、連語または短文を用いて、その日本語（翻訳）を片仮名で示し、そして、その片仮名の読み方を中国語の漢字で示しているものである。教科書の最初の部分だけ示す（図4）。

この中で、例えば、次のようなものがある。

“暑天”、	“天像”、	“阴天”
アツゾラ	テンニアラハレルモノ	クモリタルテンキ
阿之孰辣	听泥阿辣滑立路木诺	苦木利他路听克以

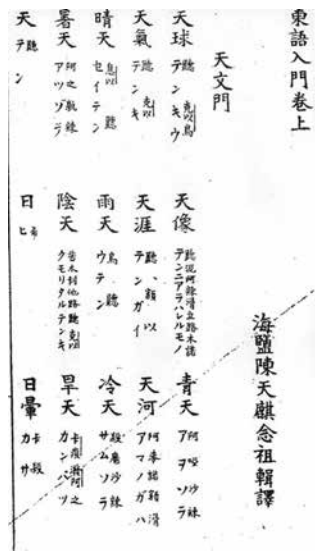


図4：『東語入門 卷上』

## 2.2 『東語正規』

『東語正規』は1900年、上海の作新社で出版したもので、著者は清朝政府が派遣した公費留学生の2人の唐宝鏐と戢翼翬である。教科書は3巻に分かれているが、巻1は文法、巻2は「散語」、そして巻3は「語訣」と中日対訳の短文（たとえば、「史事三則」、「人事六則」など）である。

『東語正規』は文字から始め、日本語の文字及び発音に関して、明確な説明を加えている。巻1は「語法」となっているが、この項目の下に次のような目次が示されている。

文字溯源、文字区别（附引证）、字母原委、字母音图、字母解释、声调、拼音法、音调、变音、文法摘要、虚字、言汇、学期、学诀

日本語の発音に関する説明は、「字母音図」から始まっている。「字母音図」では、『東語入門』とやや違うのが、『東語正規』では先に平仮名、そのあとに片仮名が示されていることである。「平仮名五十音図」のタイトルのもとで、次のような説明が施されている。

音于字母下右旁者，即字母之真体，音于中者为官音，左为粤音，右为吴音（原文如此，没有标点——引者注）三处音同，则独音于中，无同缺之，二处音同，则音于左，或右，下复以罗马字拼之，楚音与官音相似故不复载。

ここの説明は「平仮名五十音図」の下に置かれているが、そのあとの「濁音」、「半濁音」そして「撥音」などの表全体の説明である。

この説明で分かることは、『東語正規』の発音に関する説明は、「官音」で示しているだけでなく、「粤音」、「吴音」でも示していることである。この発想は当時の日本語を勉強する中国人にとって、

非常に用意周到なものである。この教科書の特徴は、ローマ字で仮名の読みが示されたことである。そのローマ字は現行の日本語のローマ字とほとんど同じである。「五十音図」の外に、「濁音」「半濁音」そして「撥音」「促音」それから「合音」という項目が挙げられている。現代日本語の中で発音が同じいくつかの仮名に関して、『東語正規』では現代の扱い方と違う扱い方がなされている。主に、「エ」と「オ」の書き方の違いで、異なった行では異なった表記の仕方で示されている。

a i u ye o

ya i yu ye yo

wa i u e wo

そのほか、「し、ち、つ、ふ」に関するローマ字発音は次のようである。

shi chi tsu fu

濁音「ざ、じ、ず」と「だ、じ、づ」のローマ字表記は現在と同じ。

za ji zu

da ji zu

「撥音」の後に「促音」と「合音」の項目が挙げられているが、「合音」は発音の項目ではなく、重複を示す記号である。

この後、「片仮名五十音図」及び片仮名の「濁音」「半濁音」、「撥音」などが挙げられている。そのあとに、更に「変音要字」、「漢字片仮名真体」、「平仮名五十音変体字母」「漢字平仮名伊呂波歌草体」及び「伊呂波歌」などが挙げられ、仮名のいろいろな使い方に関して説明が施されている。

「字母解釈」(図5)の中で、日本語の仮名の中の同じ発音の仮名について説明が加えられている。

字母解釋  
五十音中同者有三、イウエ是也。其初本有差別、如和行之ウ讀爲腐、エ讀爲惠之類。後年遷代、遠音遂違、難泊高僧、空海作伊呂波歌時、已不可分、辨矣。濁音於字之左、傍加小點、二半濁音於字之左、傍加小圈、一惟カ行五音、則加一點、者、其與ヨ行音不同、也。然今カ行五音、用者亦書小點、二與ガ行同、蓋此行五音、由カ行ガ行之音、相續而出、僅用於語中、語末不用于語首、故人之自知之耳。シ字亦然、シ字用於漢音、如點呼天下之類、又用於訓凡バマナ行、活用因段變化之語、其通用則下、極ア字者、則將其連用字、變成シ字而讀之、乃于ア字上加二小點、改爲濁音、其此變化者、惟ヒニ三字耳、如呼ビゲ、則讀シゲ、悲シ、ア、則讀シゲ、死シ、ア、則讀シゲ、之類、惟行文不變、其餘尚有各種用法、茲不具載、詳于下篇變音中、シ字本無此字、不過凡促音之通用、其字以代之、與尋常之シ字不同、故偏寫以別之、用法凡二音相合、其聲、則將上字之音、用力一頓、跳過中間之音、似讀而非讀、即讀其下之音、即中國之入聲也、見于漢音者、夫目下決心之類、見於訓者、亦不可枚舉、用于漢音、因音而變、無一定之方、用于訓者、凡ハ行活用因段變化之語、其連用言下、接ア字者、則將其連用字、變成ア字、而之有此變化者、惟ケヒリ三音耳、如打ッ、ア、則讀打ッ、食ヒ、ア、則讀食ッ、ア、或食ッ、ア、知、リ、ア、則讀知ッ、ア、之類、行文仍不變、其餘尚有各種音變、茲不具載、詳于下篇變音中、合字則自有字母以來、後人所作之省筆字、也五十音、雖無意義、然橫直看條理、并升學日本語之變化、宜先熟記此五十音、積着直讀、順讀、倒讀、背讀、練習一語、即知一語之變化、通一語、即知一語之用法。

図5：字母解釈

五十音中。同者有三。イウエ是也。其初本有差別。如和行之ウ讀爲腐。エ讀爲惠之類。後年



湮代远。音遂混杂。泊高僧空海作伊吕波歌时。已不可分辨矣。浊音于字之左旁加小点二。半浊音。于字之左旁加小圈一。惟か行五。则音加一点者。志其与ガ行不同也。然今力行五音。用者亦书小点二。与ガ行同。盖此行五音。由力行ガ行五音相错而出。仅用于语中语末。不用于语首。この後、仮名の発音変化について説明がなされている。たとえば、連用形のあとの発音など。ここで「か行」と「が行」に関する説明の中で、鼻濁音に関する説明のようにも読めるが、まだそれほどはっきりしない。しかし、下の「声調」に関する説明では、もはや、はっきりと鼻濁音の「ガ行」音について説明していることが分かる。この時代に於いて、「ガ行」の鼻濁音に関してこれほどはっきりした説明がなされていたことは、先見の明があるというべきだろう。

『東語正規』では、「声調」(図6)の項目が挙げられている。

日本文学既取之我国。故其音韵。亦与汉字大略相同。仍有音韵四声。由百十音中区别而出。韵为母音。音为子音。母音单独。久而不变。不假他音。出自天然。即アイウエオ五音是也。其余均为子音。子音与母音迥殊虽引长其音。仍有母音存也。其声不能天然自出。必假他音与母音相拼而成。其与母音。并而成子音之音者。谓之父音。即ア行第三字。ウ音之一列。除ウ音外皆是也。其拼法。若将此父音与母音第一字(ママ。筆者注。)相拼。即成父音本行之第一音。与母音第二音相拼。即成父音本行之第二音。虽然。日本字母中。本无父音也。惟其与母音相拼之音。与子音相似。故名之父音。如クア相拼之音。本非カ音。以其与カ音相似故即谓之カ音。如ルオ相拼之音。本非ロ音。以其与ロ音相似。故即谓之ロ音。余仿此。音韵既定。于是于五十音图。横推直看。各为区别。直者谓行横者谓列。如アイウエオ五字。即谓阿行。カキクケコ。五音则谓力行。アカサタナハマヤラワ十音。即谓ア列。或谓ア韵。无论横推直看。均宜从第一字算起。(中略)

凡人之口内响声谓之音。其音有从口而作者。有从齿而作者。于是就其音之所从出而命名焉。日本之音。以アイウエオ。ハヒフヘホ。ヤイユエヨ。ワヰウヱヲ此二十音为喉音。カキクケコ。ガギグゲゴ此十音为齿音。サシスセソ。ザジズゼゾ。タチツテト。ダヂヅデド。ナニヌネノ。ラリルレロ此三十音为舌音。マミムメモ。バビブベボ。パピプペボ此十五音为唇音。又ヌ字之舌音。若飘忽读之。则成ン音。此之谓拨音(其音稍稍提高。从鼻而出。又谓鼻音。如

聲調  
日本文學既取之我國故其音韻亦與漢字大畧相同仍有音韻四聲  
由百十音中區別而出韻爲母音爲子音母音單獨久而不變不假  
他音出自天然即アイウエオ五音是也其餘均爲子音子音與母音  
迥殊雖引長其音仍有母音存也其聲不能天然自出必假他音與母  
音相拼而成其與母音併而成子音之音者謂之父音即ア行第三字  
ウ音之一列餘皆外音是也其拼法若將此父音與母音第一字相  
拼即成父音本行之第一音與母音第二音相拼即成父音本行之第  
二音雖然日本字母中本無父音也惟其與母音相拼之音與子音相  
似故名之父音如クア相拼之音本非カ音以其與カ音相似故即謂  
之カ音餘此音韻既定于是于五十音圖橫推直看各爲區別直者謂  
行橫者謂列如アイウエオ五字即謂阿行カキクケコ五音則謂力  
行アカサタナハマヤラワ十音即謂ア列或謂ア韻無論橫推直看  
均宜從第一字算起如行行列等名目否則直謂之曰ア行也  
直謂之曰ノト並無別名也  
凡人口內之響聲謂之音其音有從喉而作者有從齒而作者于是就  
其音之所從出而命名焉日本之音以アイウエオハヒフヘホヤ  
イユエヨヲ此二十音爲喉音カキクケコガギグゲゴ此十  
音爲齒音サシスセソザジズゼゾタチツテトダヂヅデド  
ナニヌネノラリルレロ此三十音爲舌音マミムメモバビブベボ  
パピプペボ此十五音爲唇音又ヌ字之舌音若飄忽讀之則成ン音此  
之謂撥音此音稍稍提高從鼻而出又謂鼻音如

図6：声調

南天难仪之类)。促音所用之ッ字。谓之促音。从カキクケコ。ガギグゲゴ转出之ガギグゲゴ五音。为鼻音。共八十二音。此日本从来之本音也。

引用は長くなったが、各行の仮名に関する説明は、基本的に中国の伝統的な音韻の説明であるが、同時代のその他の教科書と比べれば、やはり画期的な意義がある。「撥音」に関する簡単な説明、ガ行の5つの鼻濁音に関する説明、上の記述に照応している。しかし、『東語正規』のこの説明は、その後の教科書ではあまりよく受け継がれていかなかったようである。

“拼音法”の項目で、拗音の発音の仕方、そして、ヤ行音とワ行音の特殊性が指摘され、同時に長音の読み方も説明されている。

『東語正規』は「音调」(図7)の項目で、独創的な説明もあり、発音の語用的特徴を指摘し、次のように述べている。

凡物必有声，声必有调，金有金声，木有木声。石有石声。凡固形之物，莫不有自然之声。然其声皆有一定。石声与金异，木声与石异。至人为万物之灵，其为声也不一而足。喜怒哀乐，同一声也。发扬疾徐，同一声也。其所以分辨之者，惟在音调之间耳。于本国语且然，况异域乎。故同一日语也，有喜而出者，有怒而出者，此不得不于声调中别之。如同一「勉強ナサイ」之语，喜而出之，则为勉人用功之意，怒而出之，即为命人读书之意。(略)

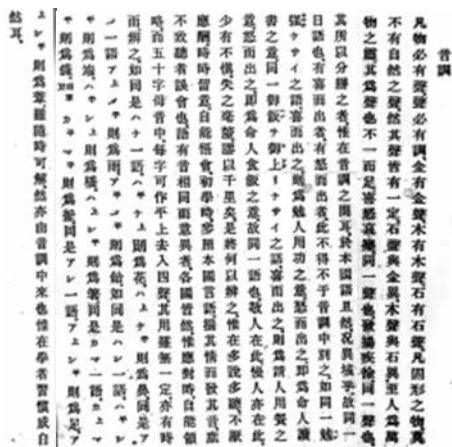


図7：音调

そして、日本語のアクセント/声調について説明がなされている。

而五十字母中，每字可作平上去入四声。其用虽无一定，亦有时而辨之。如同是ハナ一语。ハ平ナ上则为花，ハ上ナ平则为鼻。同是アメ一语。ア上メ平则为雨。ア平メ上则为飴。如同是ハシ一语，ハ平シ平则为端。ハ平シ上则为桥。ハ上シ平则为箸。同是カマ一语，カ上マ平则为鎌。(刈草刀) カ平マ平则为釜。同是アシ一语，ア上シ平则为足。ア上シ平则为苇。虽随时可解，

然亦由音调中来也。惟在学者习惯成自然耳。

この「アシ」に関する説明を見ると、標準語以外の方言の影響を受けているということもうなずけるだろう。しかしながら、この時代において言葉のアクセントに言及出来るということは、やはり画期的な意義があるといしか言えない。

その後、『東語正規』ではさらに「変音」の項目が挙げられ、日本語の単語の中の各種の音韻変化について説明がなされている。

『東語正規』は我々が現在言うところの正式な教科書とは違う。「巻一」は日本語の文字、発音、語彙及び文法に関する総論である。「巻二」は単語と連語の列挙である。そして「巻三」は「語訣」などで、文章が挙げられている。上述のように、『東語正規』に於ける発音に関する説明はそれまでの著述より、大いに進歩しているといえよう。

### 2.3 『日語入門』

『日語入門』は日本人の長谷川雄太郎の手によるもので、「1900年に、広東同文館で中国本土における日本語教育の実践のもとで誕生した日本語教科書」である<sup>1)</sup>。現在みられるのは、1901年の重刻本である。

『日語入門』は「日本仮名字体」として、片仮名、平仮名及び変体仮名（少なくとも1つ、多い場合は3つほどある）からなる「いろは歌」を挙げ、この中で、「ネ」の平仮名(?)として「子」を挙げているが、これはこれまでの教科書には見られないことである。この後、「五十音」(図8)として、アカサ、タナハ、マヤラワの3つのグループに分けて片仮名を挙げ、それぞれの仮名の右側に、中国語の漢字で発音を示している。「鼻音」もこの分野と考えられる。

阿 衣 乌 易 哦  
卡 鸡 哭 客 科  
桑 西 苏 色 啐  
达 溪 兹 敌 夺  
拉 宜 奴 立 貉  
口笑(?) 奚 孚 海 火  
马 米 母 密 木  
鸦 衣 油 爷 说  
挪 里(?) 路 立 六  
挖 伊 乌 易 哦

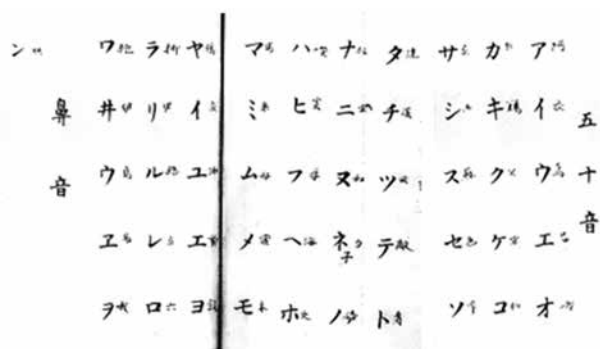


図8：五十音

1) 鮮明 (2011) 《清末中国人使用的日语教材——一项语言学史考察》(p.76) より。

(ここで?を付けたのは、PDF版では確認できないものである——筆者注)

(?) (撥音の中国語漢字の読み方は読めない——筆者注)

説明がないので、ここの漢字はどこの方言で示されているのか、不明である。しかし、上述の教科書と違うところが明白である。この後、「濁音」「半濁音」「拗音」「促音」及び「転呼音」などの項目が設けられ、一定の数の単語が挙げられている。本書は「入門」と称されているので、日本語の単語や連語と短い文を挙げているのみで、発音に関しても説明がなく、発音の研究にはさほど価値がないものかもしれない。

## 2.4 『東文法程』

『東文法程』は中学堂教科書として、商務印書館編訳所の編纂で、1905年に、商務印書館により出版されている。教科書の第二章「字母」では、「五十音片仮字母」、「五十音平仮字母」、「五十音変体字母」、「四十七音片仮字母」即ち「いろは歌」、「四十七音平仮字母」、「四十七音変体字母」で仮名が列挙されている。「五十音片仮字母」では、片仮名の下に真名と中国語の発音の漢字が挙げられている。「五十音平仮字母」では、平仮名の下に真名と片仮名が示されている。「五十音変体字母」では、変体仮名の下に真名と片仮名が示されている。その他の説明は省略するが、具体的な発音に関する説明はなされていない。

第三章「音韻」(図9)では、次のような説明がなされている。

音韻者、文字之发声也。日本著五十假名。其音分清、浊半浊(原文如此一引者注)、鼻音、促音、约音、延音、略音、便音、拗音、十类。(略)

清音者、其声音发扬、分二类。曰母韵、曰子音。母韵有五字、即アイウエオ是也。音纯、不藉他音而成。而他音藉之以成。子音除母韵五字、余四十五字、皆子音也。此四十五字、非纯一之音、皆自母韵与父音并合而成。故父音有九字。即クスツヌフムユルウ是也。其并合为一表。(下略)

「父音」や「母韻」の説明は『東語正規』の説明を踏襲しているように見える。しかし、本教科書の発音に関する記述は仮名自身からのもので、音声学的には触れていない。上述の『東語正規』に比べると、1つの後退と言っていいかもしれない。でも、本教科書の「鼻音」と「促音」(図10)に関する説明は、それまでの教科書より、ずっと具体的で、それなりの発展はあったといえる。



図9：音韻

鼻音者，須閉口从鼻发出。如字，必在他音之下。以助遺韻。

そして、それぞれ片仮名と平仮名の撥音を挙げ、その下に「呉」という中国語の発音が付けられている。そのあと、いくつかの単語が挙げられ、その発音例が示されている。「促音」に関する説明は次のとおりである。

促音者，以舌抵齒而不发声。必发于他音之下。以ッ代之。

如左。（促音下音字，依日本所读之汉音者注之。）

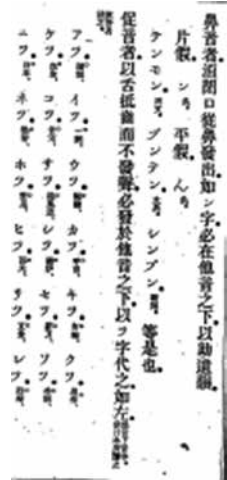


図10：鼻音、促音

『東文法程』は教科書の性質から言えば、『東語正規』に似ており、総合的な参考書で、日本語に関する総合解説、文法説明、単語及び文、連語の例も『東語正規』に似ている。但し、「鼻音」と「促音」に関する説明では、発展を見せている。

## 2.5 『和文漢訳読本巻1～6』

日本人坪内雄蔵の著で、沙頌雲、張肇熊の訳、商務書館で出版されている。「巻一」では、まず片仮名の単語例が挙げられ、その後片仮名の五十音図（撥音、濁音、半濁音を含む）が挙げられ、片仮名の下に、中国語の漢字で発音が示されている。そのあと、平仮名の単語例が挙げられ、そのあとは、平仮名の「いろは歌」が挙げられ、「日本音韻文法変化之大要」(図11)の中で、簡単に発音について説明が施されている。



図11：日本語音韻文法変化之大要

日本字母凡五十。名曰假名。正体名片假名。草体名平假名。此五十假名中、イウエ三假名均重出。盖其音本属相同。文字中殆全无区别。至キエヲ三假名、虽与イエオ异。然发音彼此相近。亦几于无别矣。此外更有浊音半浊音（均于下列假名上标明阅之自悉）拗音之别。何谓拗音。即发声时将两音急呼为一音也。如シャ读駭。リャ读掠。ニャ读捏。チョ读曲等类。而五十假名外、更有三种音。拨声促声长声是也。如ン字即拨声。一即长声。ッ即促声（此字书中多偏写与五十假名中相别）促声云者、即字恒用于二音之中。读时上下二音、须略带促声也。而五十假名中、更有所谓母韵熟音者。亦不可不知。如首行アイウエオ五字为母韵。余行均为熟音。熟音者何。谓子音与母韵相合而成也。而日本語无父音。今勉假汉字。约略明之。如客ア二音相合为カ。客イ二音相合为キ。色ア二音相合为サ。色イ二音相合为シ。客色两音即父音也。此外如音韵之变转。亦甚繁赜。今略举其最要者。即省音（谓省去子音但读母韵也）化浊音约韵等是也。如ホ读作オ（专指用在语中及语末者而言 如下列ハヒフヘ变音均同此）。ヘ读作エ。ヒ读作イ。フ读作ウ（如ハ读作ワ但可谓为变音不得谓为省音）。（以下略）

ここから、我々は『和文漢訳読本巻1～6』は読本的な性質から、日本語の発音に関する説明も非常に簡単であることが分かる。ただし、本書では、初めて「撥音」、「促音」、「長音」を挙げ、しかも、長音記号で長音を示したことなどが、それまでの教科書では見られなかったことで、説明は簡単ながら、高く評価すべきところがある。

## 2.6 「日語読本」

日本人内堀維文の著で、上海商務印書館で出版されている。『日語読本』は正式な教科書と言えよう。日本語の発音に関して、手順よく例が示されている。しかし、本教科書では、「例言」の中で、「日本文字读法有音訓二种各课所掲新语属音读者旁注片假名属训读者旁注平假名以示区别」と述べるにとどまっており、それぞれの発音に関しては、具体的な文字による記述がないのが、残念なことである。

「巻一」では、発音教育の項目が挙げられ、そのあと、「五十音図」、「濁音」、「半濁音」、「鼻音」、「長音」、「拗音」、「拗長音」及び「促音」の順に、9のユニットに分かれ、比較的系統的に例が示されている。1～9までのユニットはそれぞれ次のとおりである。

- 第一 五十音（一）アイウエオ カキクケコ
- 第二 五十音（二）サシスセソ タチツテト
- 第三 五十音（三）ナニヌネノ ハヒフヘホ
- 第四 五十音（四）マミムメモ ヤイユエヨ
- 第五 五十音（五）ラリルレロ ワヰウヱヲ
- 第六 五十音図（カタカナのみで、ンを挙げていない——筆者注）
- 第七 濁音

#### 第八 次清音及鼻音 パピプペポ ン

第九 長音（いずれも片仮名で、五十音図の順で挙げられ、濁音、半濁音を含め、いずれも長音記号で示されている。そして、長音記号の右に更に、(ア、イ、ウ、エ、オ)の発音が記されている——筆者注)

第五課以降、「文字と発音」の形で、「拗音とその長音」が挙げられている。

#### 第十 拗音及其長音

第九課の後、「文字と発音」の形で、「促音」が挙げられている。

#### 第十一 促音

このような教科書の構成は、我々が現在行っているものとほとんど同じである。このほか、教科書は「巻三」で「文字及発音第十三」で「変体仮名」が挙げられ、そこには、「いろは歌」47仮名と撥音が挙げられているが、教科書の中には、「文字及発音第十二」が見つからず、恐らく、編者のミスであろう。しかしながら、上述のように、発音教育のスケジュール設定はわりとよくできているとしても、文字による説明が見られないのは、やはり物足りないものである。

### 3. 結び

本研究では清末の日本語教科書を6部取り上げ、その発音教育について分析研究した。そのうちの3部は中国人が編纂したもので、そのほかの3部は日本人が編纂したものであるが、中国人が訳したものであり、中では2部が読本的なものである。中国人が編纂したものを見れば、最初の『東語入門』は中国の伝統的音韻学の知識を援用し、「反切」の角度から日本語の発音を説明し、中国語の漢字で日本語の発音を表記した。これは最も中国人的なやり方で日本語の発音を表記したものである。『東語正規』ではよりよい中国人の日本語学習法を示したものである。ローマ字を導入したばかりでなく、中国語の方言発音で日本語の仮名の発音を表記し、しかも、ガ行の鼻濁音に関する説明さえあった。当時の中国人の日本語発音研究の最新鋭さを表したものである。これは同時期の日本人編纂の教科書にも見ないものである。そのほか、日本語のアクセントについての記述もあり、中国人の日本語発音研究の最初の手本になるものである。『東文法程』では発音に関する記述は簡単であるが、「鼻音」と「促音」に関しては具体的な記述があり、編纂者が日本語学習時の中国人の問題点を意識していることを物語っている。

なお、この研究は、中国・人民教育出版社課程教材研究所の中国社科基金重大項目「中国百年教科書整理と研究」の「百年 中小学日本語教科書の変遷的研究」の課題の一つである。

【参考文献】

石晓军《中日两国相互认识的变迁》台湾商务印书馆 1992

李小兰《清末日语教材之研究》浙江大学 学位论文 2001

——《清末日语教材的特点及其影响》《日本学论坛》2004年第2期 41-47

——《清季中国人编日语教科书之探析》《杭州师范学院学报（社会科学版）》2006年7月 第4期 97-102

马可英《民国时期中国人编日语教材之研究——以“日语基础丛书”为例》浙江工商大学 硕士学位论文 2010年12月

人民教育出版社课程教材研究所（编著）《新中国中小学教材建设史（1949-2000）研究丛书 日语卷》2010年10月

唐磊 林洪（主编）《全日制义务教育日语课程标准（实验稿）解读》北京师范大学出版社 2002年4月

鲜 明《〈东语正规〉在中国日语教育史上的意义》《日语学习与研究》2011年第6期 总157号 75-81

——《清末中国人使用的日语教材——一项语言学史考察》中央编译出版社 2011年

续三义《从〈义务教育课程标准试验教科书·日语〉看初中日语教学中的语音教学问题》《试教通讯》2003年第25期（总第95期）15~17 人民教育出版社课程教材研究所

中华人民共和国教育部制订《全日制义务教育日语课程标准（实验稿）》第一版 北京师范大学出版社 2001年7月

金田一春彦『日本語の特質』．新NHK市民大学叢書10 東京 1981

竹中憲一『満州地域日本語教科書集成』1～7 緑陰書房 2002年9月